

新しい世界に向かって

箕浦 龍一



4年前の7月、思い立って、総務省という役所を辞めることにしました。

国家公務員時代は、大変な仕事ではありましたが、面白かったといえ、なかなか面白く、刺激的な日々を過ごしたなあ、という思いもあり、また、当時ともに仕事をした仲間たちの多くは、今でも大好きな仲間たちです。

でも、去ることにしました。辞めた理由は百もあるのですが、一つは、現職の公務員の身分を持ったままでは、身動きが取りづらいと感じた、ということがあったと思います。

総務省では、部局の働き方やマネジメントの改革を進めましたが、例えば官邸や国会との関係については、現役官僚として物を言うには、限界もあります。

本当に変えたい事柄を変えるには、省庁の中から動いても、役所の大幹部、財政当局や制度官庁と言われる各省の壁、官邸の壁、与党の壁、野党の壁、国会の壁、などなど。気が遠くなるほど、時代の変化に対応するための日本丸の舵を切り直すのは、大変そうです。外からの発信でも、いろいろできることがあるような気がしました。

同時に、総務省での働き方改革の取組を視察に来た企業や自治体の関係者と話をするうちに、この国、本当にヤバいぞ、と思ったのです。

テレワークの普及推進を任務の一つとしていた総務省では、10年以上前から、当時の高市早苗大臣や野田聖子大臣の指導の下、ほとんどの職員は、日常的にテレワークを実施していましたが、IT企業業界を除くほとんどの民間企業は、ほとんどが消極的で、その主な理由が、目の前にいない社員をどのように管理したり評価するのか、という素朴な認識レベルでした。働き方・ビジネススタイルやマネジメントに至るまで、相当残念な状況が想像され、これは、霞が関にとどまらず、日本全体のビジネススタイルが圧倒的に時代遅れとなっているのではないかと気づくに至ったのです。

以来、総務省の働き方改革だけでなく、日本のビジネススタイルを変えることを、ライフワークの一つと考えるようになったのですが、そんな頃に、退職に至るもう一つのきっかけと出会いました。

総務省に視察に訪れた軽井沢の別荘族の方々が、軽井沢でワーケーションを誘致したいと相談をいただいたのです。最初は、「何を言っているのか？」と言う印象でしたが、話を聞き、また、現地にも足を運んで関係者と意見交換をする中で、地域側と訪問側の双方にとって、大きな可能性を感じるに至りました。以来、本業の傍ら、ライフワークとして、ワーケーションの普及に一役買うこととして、総務省の担当部局（私自身は、業務での直接の所管ではなかった。）、当時の経産省や観光庁にもアポイントを取って説明に行き、協力を求めたり、つながりのある企業にも声を掛けて、軽井沢などでの体験イベントに参加したりしました。新型ウイルス問題の1年以上も前のことです。

ワーケーション workcation は、働くという意味の work と観光・休暇という意味を持つ vacation の複合した造語と言われていますが、現

在アーリーアダプターと呼ばれる企業や個人が好んでリピートする地域では、日常とは異なる地域を訪れ、日頃出会えない様々なジャンルの人や企業関係者のイノベティブな交流、日頃のビジネスでは得ることのできない貴重な人脈形成などが偶発的に起こり始めていました。

何よりも、全国様々な場所に、また会いたいと思える「友達」が次々とできていく感覚が、トドメを差したと言って良いと思います。そこで出会った仲間たちと、たまには東京で集まり、ときには誘い合って別の地でワーケーションで集い、ときには仕事を頼んだり頼まれたり、ビジネスにもつながる関係性が生まれてく。こんな体験が、参加した者を、沼へと引きずり込むのです。

本格的なデジタル社会となった21世紀、かつての常識や社会の形が大きく、激しく変化しています。長年当たり前と思われてきた事柄やかつて優れていたと信じられていた価値が大きく揺らぎ、崩れ始めています。油断していると、あっという間に世の中は変わってしまうかもしれないと言う、目まぐるしいとも、面白いとも思える現代社会にあって、私たちは、これまで以上に、冷静に観察し、自分で考え、洞察し、仮説を立てたり検証したり、という知的創造・想像活動を、自らの意思と責任で、行いうるかが重要になってくるように思います。同時に、コツコツ積み上げた知識や経験も、変化する世界の中で、絶えずアップデートしていくことが求められるでしょう。

永田町や霞が関は、中の人たちも外からも、「日本の中枢」と考えられています。ですが、閉じた狭い世界に閉じこもっているだけでは、気づかない世界の変化や動きがたくさんある。他の多くの様々な業界も、実は同様でしょう。ワーケーションで、様々な地域、業種や属性の人たちが交わり、相互に対等かつ自律した者同士、学び合うことで、ある意味、知

的衝撃とともにアップデートすることができるように思います。

これは、もう面白いとしか言いようがないと感じましたし、ワーケーションはVUCAと呼ばれる現代社会の必然ではないか、とすら思いました。同時に、霞が関に残っているのは、間もなく、国会開会中は東京を離れにくくなるということを考えるにつれ、その先の公務員生活にしがみつ়理由は、もはや残っていませんでした。

退職後は、フリーランスとして、民間分野では、オフィスアワードや全国ワークスタイル変革大賞の審査員を頼まれる一方で、自治体の働き方やマネジメント改革のお手伝いや各地のワーケーションのお手伝いやイベントでの登壇など、年間の半分は、日本全国各地を旅して回っています。

そんな私ですが、ご依頼を受けて、昨年度から、法学部で講義を担当しております。大学の仕事は、授業準備など、思った以上に大変ですが、学生の皆さんから学んだり気づかされることも多く、非常に素晴らしい時間もいただいております。そんな素晴らしい学生の皆さんのために、微力ながら、少しでもお役に立てるよう、努力してまいります。